

病室の花

寺田寅彦

青空文庫

発病する四五日前、三越^{みつこし}へ行つたついでに、ベコニアの小さい鉢^{はち}を一つ買って来た。書斎の机の上へ書架と並べて置いて、毎夜電燈の光でながめながら、暇があつたらこれも一つ写生しておきたいと思つていたが、つい果たさずに入院するようになった。

入院の日に妻がいろいろの道具といつしよにこの鉢を持って来た、そして寝台のすぐ横にある大理石を張つた薬びん台の上に乗せた。灰色の壁と純白な窓掛けとで囲まれたきりで、色彩といえただ鈍い紅殻^{べんがらぬ}塗りの戸棚^{とだな}と、寝台の頭部に光る真鍮^{しんちゆう}の金具のほかには何も無い、陰鬱^{いんうつ}に冷たい病室が急にあたたかくなりぎやかになった。宝石で作つたような真紅のつぼみとビロードの

ようにつやのある緑の葉とを、臥ねながら灰色の壁に投射して見ると全く目のさめるように美しかった。

いつでも思う事ではあるが、いかに精巧をきわめた造花でも、これを天然の花に比べては、到底比較にならぬほど粗雑なものである。いつかアメリカのどこかの博物館で、有名な製作者の造ったというガラスの花を見たが、それも天然の花に比べてはまるで話にならぬほどつまらない、しかもいやな感じのするものであった。このような差別の根原はいったいどこにあるだろう。色彩や形態に関するあらゆる抽象的な概念や言葉を標準にして比較すれば造花と生花の外形上の区別は非常に困難な不得要領なものになってしまう。「一方は死んでいるが他方は生きている」という人

があるかもしれない。しかしそれはただ一つの疑問を他の言葉で置き換えたに過ぎない。実際の明白な区別は、やはり両者を顕微鏡で検査してみ始めてわかるのではあるまいか。一方はただ不規則な乾燥したそして簡単な繊維の集合か、あるいは不規則な凹^おうと^う凸のある無晶体の塊^{かたまり}であるのに、他方は複雑に、しかも規則正

しい細胞の有機的な団体である。美しいものと、これに似た美しくないものとの差別には、いつでもこのような、人間普通の感覚の範囲外にある微妙な点があるのではあるまいか。人間でも意識の奥に隠れた自己といったようなものが、その人がらの美しさを決定する要素ではあるまいか。こんな事を考えながらベコニアの花をしみじみ見つめてみると、薄弱な自分の肉眼の力ですら、花

弁の細胞の一つ一つから出る生命の輝きを認めるような気もする。

入院の翌日A君が菜の花を一束持って来てくれた。適当な花瓶かびん

がなかったからしばらく金かな盥だらひへ入れておいた。室咲きである

せいか、あのひばりの声を思わせるような強い香がなかった。ま

もなく宅うちから持って来た花瓶にそれをさして、室へやのすみの洗面台

にのせた。同じ日に甥おいのNが西洋種の蘭らんの鉢はちを持って来てくれた。

代赭たいしやいろ色の小鉢に盛り上がった水みず苔こけから、青竹篋あおたけべらのような厚

い幅のある葉が数葉、対称的に左右に広がって、そのまん中に一

輪の花がややうなだれて立っている。大部分はただ緑色で、それ

に濃い紫の刷毛目はけめを引いた花冠は、普通の意味ではあまり美しい

ものではないが、しかしそのかわりにきわめて品のいい静かに落

ち着いた美しさがあつた。これを、花やかに美しい、たとえばおとぎ話の王女のようなベコニアと並べて見た時には、ちようど重々しく沈鬱ちんうつなしかも若く美しい公子でも見るような気がした。花冠の下半にたれた袋のような弁の上にかぶさるようになった一片の弁は、いつか上に向き直つて袋の口を開くだろうと思つていたが、とうとういつまでも開かなかつた。

そのうちにT君夫妻がまた大きなベコニアの鉢はちを持って来てくれた。それは宅うちから持つて来たのに比べて数倍大きくみごとなものであつた。この花が来てみると今まであつたベコニアは急に見すばらしい見る影もないものになつてしまつた。宅のは花の色ももう実際にいくらか薄くなつたのだらう、これに比べて見ると今

度のは全く目のさめるようにあざやかであつた。古いほうのは室のすみの洗面台の上にやつてしまつて、この新しいベコニアを枕もとに飽かずながめた。しかし不思議な事には蘭のさびしい花はこれに比べてもちつとも見劣りがしないのみか、かえつて今までよりも強くこの花の特徴を主張するかと思われた。古い小さいベコニアはそれでも捨てるのは惜しかつた。自分は時々頭をねじ向けて洗面台の上に目をやつて、花も葉も日々に色のあせて行く哀れな鉢を見ないではいられなかつた。さびしい花瓶の菜の花もそのたびに淡いあわれの情趣を誘うた。

今度はI君がサイクラメンとポインセチアを届けてくれた。ポインセチアはこれまで花屋で見かけた事はあるが、名はそれまで

は知らなかった。もらった鉢にさしてある木札で始めて知った。薬びん台に載せて始めてよく見ると、葉鶏頭に似た樹冠の燃えるような朱赤色は実に強い色である、どうしても熱帯を思わせる色である。花よりはむしろ鳥類の飾り毛にでもふさわしい色だと思う。頂上を見ると黄色がかった小さい花がぞくせい簇生しているが、それはきわめて謙遜な、有るか無きかのものである。いったい自然はどうしていつもの習慣にそむいてこの植物の生殖器をこんなに見すばらしくして、そのかわりに呼吸同化の機関たる葉をこれほどまでに飾ったのだろう。植物学者や進化論者に聞いたら何かの学説はあるかもしれないが、それにしても不思議な心持ちがしないではいられない。自分はこのような植物の茂っている熱帯の

樹林を想像しているうちにシンガポールに遊んだ日を思い出した。椰子やしの木の森の中を縫う紅殻べんがらいろ色の大道に馬車を走らせた時の名状のできない心持ちだけは今でもありあり胸に浮かんで来るが、細かい記憶は夢のように薄れて、ただ緑と赭あかの地色の上に染め出された更紗さらさら模様もようのように混雑してしまっている。それでもこの寒く冷たい寢床の上で、強烈な日光と生命のみなぎった南国の天地を思うのはこの上もない慰藉いしやであった。

サイクラメンのほうは少し生育が充分でなかった。花にもなんだか生気が少なく、葉も少し縮れ上がって、端のほうはもう鳶とびい色いろに朽ちかかっていた。自分はこの花について妙な連想がある。それはベルリンにいたころの事である。アカチーン街の語学の先

生の誕生日に、何か花でも贈り物にしたいと思って、アポステル
・パウルス・キルへの前のけちな花屋へ寄つて、あれかこれかと
物色した末に買ったのがこの花であつた。日本から輸入されたら
しい桃色のちりめん紙で鉢はちを包んでもらつて、すぐその近所の先
生の宅うちへ持つて行つた。その時に先生がこれはアルペンファイアルヘン董とい
う花だと教えてくれた。そのせいだか自分にはサイクラメンとい
名前よりこの名のほうがなんとなくふさわしいような感じがする。
あの女先生はその後どうしたのか。日本の留学生ばかりを弟子でしに
して生活していたのが、大戦の爆発と共に留学生は皆引き上げる
し、同時に日本人に対する市民の反感が高まつた時に、なんらか
のいやな経験をしたのではあるまいか、その後の生計をどうして

立てて行つたらうか。これは何かのおりには時々思い出す事であつた。先生は結婚後まもなく夫のドクトルに死なれ、退役軍人の父親と、夫の忘れがたみで、当時十四ぐらゐであつた娘のヒルデガルトと二人でさびしく暮らしていた。よくはわからぬが父親とはあまり仲がよくないらしかつた。ある日われわれお弟子仲間二人でこのヒルデガルトを連れて、ルイゼン座のおとぎ芝居を見に行つた事がある。芝居は「雪姫」であつた。観客の大部分は無論子供であつたので、われわれ異国の大供連はなんだか少しきまりが悪いようであつた。王妃に扮した女優は恐ろしく肥つた女であつたが、美しい声で「鏡よ鏡よ」を歌つた。それから二三日たつて聞いてみると、ちようどその晩に先生は激烈な腹部の痙攣

を起こして大騒ぎをしたとの事であつた。先生の目の周囲には青黒い輪が歴然と残つていた。自分はなんという理由なしに、この病気を起こさせた責任が自分らにあるような気がしてしかたがなかつた。とにかくおとぎ芝居へ行つたのはただあの時一度だけであつた。

五歳になる雪子ゆきこが姉につれられて病院へ見舞いに來た。始めのうちはおとなしくして看護婦の顔ばかり見て黙つていたが、だんだんに慣れて來て、おしまいはとうとう寝台の上まで上がり込んで來た。そして枕まくらもとの花鉢はなばちをのぞき込んで、葉陰にかくれた木札を見つけ、かなで書いた花の名を一つ一つ大きな声で読み上げた、その読み方がおかしいので皆が笑つた。近ごろかたかな

を覚えたものだから、なんでもかたかなさえ見れば読んでみなくてはいられないのである。それから後は来るたびごとに寝台にすわりこんで、この花の名を読まない事はなかった。自分は今さらのように「文字」というものの不思議な意味を考えさせられ、また人間の知識の未来というような事についてもいろいろの事を考えさせられた。

ポインセチアとはいったいどうつづるのか知りたいと思っていた。偶然丸まるぜん善ぜんから取り寄せた「近世美術」を見たら、その中にロージャー・フライという人がこの花を主題にして描いた水彩があつたのでそれがわかった。この絵に付した解説にこんな事が書いてある。「この絵はほんとうに特徴のスタデイと呼ばれるべきも

のである。物をそのままに見て、そして偏見なしに描こうとする近代の試みの好適例であるうんぬん。「壁に布切れやしわくちやの紙片をだらしなく貼はりつけたのをバックにして、平凡な牛乳びんに二本のポインセチアが無雑作むざうさに突きさしてあるだけである。全体の感じはなるほど悪くないが、今枕まくらもとにある本物と比べて見ると、どうもなんだか葉の排列のしかたがおかしい。植物学者の目で見ればこれは確かに間違っている。しかし前の解説を書いた美術批評家は上のような賛辞を呈している。この批評家のいつている事は**ずいぶんいいかげん**のようにも思われるが、また考え直してみるとほんとうの**よう**にも思われた。

看護婦は毎朝これらの花鉢はなばちを室外へ持ち出して水をやってく

れた。そのたびごとに廊下でだれかが「マアきれいな花ですこと」とぎようさんにほめる声が聞こえた。ベコニアや蘭らんの勢いのいいのに比べて、ポインセチアは次第に弱るように見えた。まっすぐに長い茎のまわりに規則正しい間隔をおいて輪生した緑の葉がだんだんに黄緑色に変わって来るのであった。水をやりすぎるためではないかと思われたから看護婦にも妻にもそう注意した。しかし積極的にさしずをするだけの知識はないからそのままに任せておいた。そのうちに葉は次第につやが無くなり、黄みが勝つて来て、とうとう下のほうの葉が一つ二つ落ち始めた。残った葉もほんのちよつと指先でさわるだけでもろく落ちるのであった。何かしら強い活力で幹から吹き出しているように見えた威勢のよかつ

た葉がきわめてわずかな圧力にも堪えず、わけもなく落ちるのが不思議なようにも思われた。このようにして根もとに近いほうから順序正しくだんだんに脱落して行くのであった。

S君がまたベコニアを届けてくれた。大きさは前にT君からもらったのと同じくらいであった。しかし前のに比べて花の色も葉の色もいったいに薄くてなんとなくさびしかった。そのかわりまたなんとなくあつさりした野の花のような趣はあった。同じ種類の花でありながら培養の方法や周囲の状況の相違でこれほどにもちがったものができるかと思つた。土の性質、肥料や水の供給、それから光線や温度の關係で同じ種から貴族と平民が生まれるのであった。花の貴族と平民とは物を言わないから争鬪はない。こ

んな事を考えたりした。

次にはO君から浅い大きな鉢はちにいろいろの草花を寄せ植えにしたのを届けてくれた。中心になっっているのはやはりベコニアで、その周囲には緑色の紗しやの片々と思うようなアスパラガスの葉が四方に広がり、その下から燃えるようなゼラニウムがのぞき、低い所にはアルヘイ糖のように蟹かにシヤボの花がいくつか鉢の縁にたれ下がっていた。一つ一つの花はきれいであるがこのように人工的に寄せ集めたところになんとなく物足りない不自然さがあつた。しかしともかくもにぎやかに花やかなものであつた。眠られぬ夜中の数時間はこの花のためにもどれほどか短くされた。眠られぬままにいろいろな事を考えた中にも、N先生が病氣重態という報

知を受けて見舞いに行つた時の事を思い出した。あの時に江戸川えどがわのおおまがり大曲の花屋へ寄つて求めたのがやはりベコニアであつた。紙で包んだ花鉢をだいにぶら下げて車にも乗らず早稲田わせだまで持つて行つた。あのころからもうだいぶ悪くなつていた自分の胃はその日は特に固く突つ張るようで苦しかった。あとから考えてみるとあの時分から自分の胃はもう少しずつ出血を始めていたのである。そうとも知らずわずかの車賃を儉約するつもりで我慢して歩いて行つた。重態の先生には面会は許されなかつた。しかし持つて行つた花は夫人が病床へ運んでくれた。夫人はやがて病室から出て来て「きれいだと言つていましたよ」と言つた。考えてみるとこれが先生から間接にでも受けた最後の言葉であつた。今

自分は先生の生命を奪い去った病と同じ病で入院している。幸いに今度はたいして危険もなく済みそうである。同じ季節に同じ病気をして同じベコニアの花を枕まくらもとに見るとするのは偶然の事といえは偶然であるが、よく考えてみたらそこに何かの必然の因果があるのではないかという気がした。普通に偶然の暗合と見られる事でも、実はそうでない場合がかなりしばしばある。先生と弟子との間にある共通な点があれば、それは単に精神的のものででしもこれが肉体の上に多少の影響を及ぼさないとはいわれない。あるいは逆に肉体に共通な点のあるのが原因でそれが精神に影響して二人の別々な人間の間には師弟の關係を生じる一つの因縁にならないとは限らぬ。もしそうだとすれば先生と弟子とが同じ病気に

かかる プロバビリティ 確率 は、全く縁のない二人がそうなるより大きいかもしれない。病気が同じならば同じ時候によけいに悪くなるのはむしろありそうな事である。こんな事を考えたりした。そしてその時にはこれがたいへんに確実な セオリー 理論でもあるような気がしたのであった。

退院するころには らん 蘭の花もすっかり枯れて葉ばかりになった。ポインセチアも頂上の赤い葉だけが鳥毛のようになって残っていた。サイクラメンもおおかたしなびてしまった。しかしベコニアだけは三つとも色はあせながらもまだ咲き残っていた。それでもかくもみんな退院の荷車に載せて持ち帰るつもりでいたが、あいにくその日雨が降りだした、そして荷車には雨おおいがないと

いうので人力車で荷物を運ぶ事になった。それがために花鉢はなばちは皆残して行く事にした。看護婦に、迷惑だろうがどうにか始末をしてもらいたいと頼んだら「いただきます」と答えてニコニコしていたので安心した。ただO君からもらった寄せ植えの鉢はちだけはまだ花の色もあざやかであるから惜しいと言つて、妻がひぎの上にのせて持ち帰つた。しばらくはそれを応接間へ出してあつたが、後には縁側の外の盆栽台に置かれたままで、毎夜の霜にさらされていた。ベコニアはすっかり枯れて莖だけが折れた杉すぎ箸ばしのようになり、蟹かにシヤボの花も葉もうだったようにベトベトに白くなつて鉢はちにへばりついている。アスパラガスの紗しやのような葉だけはまだ一部分濃い緑を保つて立っている。

三週間余り入院している間に自分の周囲にも内部にもいろいろの出来事が起こった。いろいろの書物を読んでいろいろの事も考えた。いろいろの人が来ているいろいろの光や影を自分の心の奥に投げ入れた。しかしそれについては別に何事も書き残しておくまいと思う。今こうしてただ病室をにぎわしてくれた花の事だけを書いてみると入院中の自分の生活のあらゆるものがこれで尽くされたような気がする。人が見たらなんでもないこの貧しい記録も自分にとってはあらゆる忘れがたい貴重な経験の総目次になるように思われる。

(大正九年五月、アララギ)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

病室の花

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>